

#### §4 問答の観点からの推論

1、推論は、問いを前提する:理論的推論の場合

2、推論は、問いを前提する:実践的推論

(1)実践的推論の定義

(2)アンスコムとウリクトの論争

(3)実践的知識と実践的推論の関係

・実践的知識は実践的推論の結論である。

・このことは、実践的知識が観察に寄らず、かつ推論によらず即座に得られるということと矛盾しない。

#### ●次のアンチミーをどう解決するのか？

テーゼ: すべての知識は、推論の結論である。ゆえに実践的知識も推論によって得られる知識である。

アンチテーゼ: 実践的知識は、推論によらないで得られる知識である。

解決: 実践的知識が形成されるのは、実践的推論の結論としてなので、テーゼは成り立つ。

他方、「何をしているのですか」という問いに対する答えとしての実践的知識は、すでにもっている実践的知識を反復するだけである。ゆえにアンチテーゼも成り立つ。このように考えると、アンチテーゼは、実践的知識を理解するには推論の結論として理解する必要があるという主張とは矛盾しない。

補足: 聞き手の理解はどうなるのか。

「なにをしているのですか」と問うて、「カレーを作っています」という返答を得た者は、その返答を理解するときに、推論を必要とするのだろうか。質問者がその答えを理解するとき、それを「あなたはカレーを作っている」とか「Hさんはカレーを作っている」という命題として理解するだろう。このとき、相手の「(私は)カレーを作っています」の「私」を「あなた」や「Hさん」に置き換える必要がある。この代入推論は、「相手の「カレーを作っています」という発言は、私の立場から引用を解除すると、どういう発言になるのだろうか」という問いに答えるための推論である。

対話において、相手の発言を理解するときには、つねにこのような代入推論が行われている。この代入推論は、単に指示対象が同じ語を代入するということとは異なる。相手の言う「私」と私のいう「あなた」が同じ指示対象をもつことを理解することにもとづく、代入である。

————— 本日ここから

#### (4)実践的推論の暫定的定義

・アリストテレスの定義: 評価語を含む前提を持ち、結論が行為である(ないし行為に通じる)ような推論。

ウリクトによると、理論的推論と実践的推論の区別は、アリストテレスに始まる。というよりも論証 *apodeixis* そのものを分析して、推論の分析を始めたのもアリストテレス(『分析論前書』)である。

・アンスコムの定義: 「行為を導く推論」(*Intention*, 33, 35 節)「結論は行為であり、その行為の意味はその推論で提示されている前提によって明示される。」(*Intention*, 33節)

アンスコムは、次のような理解を批判する。

「実践的三段論法は結論を証明するものだと考えられてきた」(Intention, 33節)

「現代の著者たちが常に実践的三段論法的前提に「大前提」「小前提」という表現を使ってきた。」(Intention, 33節)

アンスコムの説明では、なぜある前提がある行為を導くことができるのかの説明ができていないように思われる。

・ウリクトの定義:「第一の前提は、ある結果を達成しようとする行為者の意図についての言明である。第二の前提は、この目的を達成するために彼がする必要があるとかがえること言明である。結論は、大ざっぱに言うと、行為者がその必要なことを行い始めること、という趣旨の言明である。」(von Wright, 'On So-Called Practical Inference', Acta Sociologica 15, p. 39).

ウリクトは、前提の意図と結論の人の間には、論理的に必然的な結合があり、第二の(認識的)前提が、第一前提の第一の意図と結論の中の第二の意図を「媒介」する、と考える。これを、「目的から手段への意図の転送」(transmission of intention from ends to means) (Ibid. p. 45) の原理とよぶ。この原理は、カントが真だと考えた原理と同一のものであるという。「目的を意志するのは、(理性が彼の行為に決定的な影響をおよぼす限りで)、彼が行使できる不可避的に必然的である手段をもまた意志する。」(The Moral Law, transl. by H. J. Paton, pp. 84-85)かれは、理論的推論の場合には、真理が転送されるが、実践的推論の場合には、意図が転送されると考える。

・私の暫定的な提案:推論全体を理論的推論と実践的推論の二種類に分けたいので、理論的推論以外の推論を全て実践的推論としたい。(感情や欲求などの表明を結論とする推論も、実践的推論に含めるためである。)

定義1:実践的推論とは、理論的推論以外の推論である。

定義2:実践的推論とは、前提および結論のなかに真理値をもたない文ないし発話をひとつ以上含んでいる推論

これらの定義が十分なものになるためには、「推論」の定義が必要である。

定義a:推論とは、他の命題を手がかりにして、問いの答えを得ることである。

この定義の欠点は、このように推論を定義すると、「推論は問いを前提する」という§4で証明しようとしていることが、定義から帰結することになり、§4の証明が、循環になってしまうことである。では、ブランダム「コミットメント」概念を借用して、次のように定義するのはどうだろうか。

定義b:推論とは、前提の発話がともなう世界や社会へのコミットメントを、結論の発話が保存しているような発話の関係である。

(これについては、継続の課題とします。)

## (5) 5つの発語内行為を結論とする実践的推論

サールの分類する5つの発語内行為は、行為である。それゆえに、その行為は、実践的推論によって成立する。それゆえに、「なぜ、そうするのか」と問われたら、「なぜなら、・・・」という答えによって、行為の理由が示されるだろう。

### (a) 行為拘束型発話と実践的推論の関係

「この本をさしあげましょう」(行為拘束型発話、約束の行為)

行為拘束型発話をするとは、約束の行為を行うことである。そこで、その行為の理由を「なぜ」と尋ねることができる。

「あなたはなぜその本をあげるのですか」

「なぜなら、この本は面白いからです」(行為の理由)

次のような実践的推論によって、この理由から約束の行為が帰結する。

面白い本をさしあげましょう。(約束の発話)

これは面白い本です。

∴この本を差し上げましょう。(約束の発話)

### (b) 行為指示型発話と実践的推論の関係

「この本を読んで下さい。」(行為指示型発話、要求の行為)

行為指示型発話を発話することは、相手に行為を指示する行為を行うことである。したがって、その行為の理由を「なぜ」と尋ねることができる。

「なぜその本を読むように要求するのですか」

「なぜなら、それが古典だからです」or「なぜなら、古典を読んで欲しいからです」

次のような実践的推論によって、この理由から要求の行為が帰結する。

古典を読んで下さい。(行為指示型発話)

この本は、古典です。

∴この本を読んで下さい。(行為指示型発話)

### (c) 宣言型発話と実践的推論の関係

「被告を懲役20年の刑にする」(宣言型発話)

この宣言型発話を行うことは、刑を確定する行為である。その行為の理由について「なぜ」と問うことができる。

「なぜあなたは、被告を懲役20年の刑にするのですか」

「被告は、Xという犯罪を犯したからです」

次のような実践的推論によって、理由から宣言が帰結する。

被告はXという犯罪を犯した。

Xという犯罪を犯したものには、懲役20年の刑がふさわしい。

∴被告を懲役20年の刑に処する。

### (d) 表現型発話と実践的推論の関係

「ありがとうございます。」(表現型発話)

表現型発話をすることは、感情を表明という行為を行うことである。そこでその理由を「なぜ」と問うことができる。

「なぜ、あなたは、Hに感謝するのですか」(感情表現の理由)

「Hに、お世話になったからです。」

次のような実践的推論によって、この理由から感謝が帰結する。

私はHにお世話になった。

お世話になった人にお礼を言いたい(言うのが礼儀だ)

∴ありがとうございます。(Hに向かって発言)

ところで、私たちが感情をもつとき、私たちはそれを言語で表現する。もし言語で表現されていないならば、私たちは自分の感情を理解することができないし、またその場合にはおそらくそもそも感情が存在しないだろう(無意識の感情があるのかど

うか、という問題にはここでは触れない)。一人にいるときに自分の感情を語る言葉は、「私は悲しんでいる」というような感情を記述する主張型の発話になるのではなく、「私は悲しい」というような表現型発話になるだろう。

ところで、サールは、表現型発話を、 $E \phi (p) (S/H + \text{property})$ と特徴付けていた。これは、話し手(S)ないし聞き手(H)の状態(property)についてのある心理状態(p)を聞き手に対して表現する行為だと特徴付けていた。

「私は悲しい」という発話は、たしかに聞き手に対して感情を表現する行為となるが、しかし一人で内言(inner speech)するような場合には、他者に感情を表現しているのではない。しかし、自分の感情を記述しているのでもない。この発言によって、私は自分の感情を「悲しみ」として構成している。自分の欲求を構成する発話もまた、表現型発話を一人で行うときの発話であろう。(これらの心の構成の働きは、発語媒介行為の一種なのだろうか?これもまたペンディングとする)

同様に、一人にいるときに発話する行為拘束型発話は、話し手がそれによって自分の「意志」や「意図」を構成する発話である。(これら心の構成と推論の関係については、次のセクションで述べる)

### (e) 主張型発話と実践的推論の関係

結論は真理値をもつ発話であるが、前提に真理値を持たない発話があるとき、私たちの上記の定義によると、その推論は実践的推論である。そのような推論が果たして存在するのだろうか。例えば、次はどうだろうか。

私はXを食べたい。

私が食べたいものは、あまいものだけだ。

ゆえに、Xはあまいものだ。

これは、実践的推論とは考えられない可能性がある。なぜなら、第1の前提は、私の欲望の表明と言うよりも、欲望を記述している発話である可能性があり、その場合には、これは理論的推論になるからである。

### (6) 事前意図、行為、欲求、感情を結論とする実践的推論

#### (a) 事前意図を結論とする実践的推論

意図が発話される時、少なくとも日本語の場合、それは事前意図になる。したがって、実践的推論は次のように用なる。

何か飲もう(事前意図)

これは飲み物だ(状況認識)

これを飲もう(事前意図)

#### (b) 行為を結論とする実践的推論

何か飲みたい(欲求/事前意図)

これは飲み物だ(状況認識)

これを飲む。(行為)

#### (c) 欲求を結論とする実践的推論

何かか飲みたい。

(欲求)

これは飲物だ。

(状況認識)

これを飲みたい。

(欲求)

欲求が結論となる実践的推論は、欲求が前提であり、行為が結論である実践的推論の、結論を欲求を表現する発話に書き換えることによって得られる。「xする」という結論を「xしたい」という結論に変更すればよい

上記の欲求の実践的推論を、一般化すれば、次のようになる。

私はxを欲する。

私がyすれば、私はxを獲得できる

私はyを欲する

この場合の状況認識は、私の行為を前件とする条件法になっているが、欲求の三段論法には、他のパターンもある。

私はxを欲する（お金もちになりたい）

yが生じると、私はxを獲得できる（宝くじに当たれば、私はお金持ちになれる）

yが生じることを欲する（宝くじに当たりたい）

この場合には、状況認識の条件法の前件は、私の行為ではなくて、未来の出来事である。私がまだ行っていない行為も、また未来の出来事であるから、欲求の三段論法一般は、次の形式をとるといえる。

私はxを欲する（欲求）

未来の出来事yが生じると、私はxを獲得できる（未来にある出来事が生じるならば、上記の欲求が実現する）

∴私はyを欲する（未来のある出来事の実現への欲求）

#### (d)感情(感情表現)を結論とする実践的推論

お金が欲しい。

欲求

宝くじに当たる＝お金が手にはいる。

状況認識

だから、嬉しい。

感情

状況認識「宝くじに当たる＝お金が手にはいる」は、未来の出来事でなく、現在(現在完了)の出来事である。ある欲求があり、その実現と関連した出来事が起こったときに、感情が生まれる。

#### (e)まとめ

##### <事前意図の実践的推論>

事前意図(ないし欲求) & 状況認識(「行為yをすれば、事前意図xが実現する」) ⊢ 行為yをしようとする事前意図

##### <行為(ないし意図)の実践的推論>

事前意図(ないし欲求)x & 状況認識(「行為yをすれば、事前意図xが実現する」) ⊢ 行為y(をしようとする行為内意図)

##### <欲求の実践的推論>

欲求x & 状況認識(「未来の出来事yが生じれば、欲求xが実現する」) ⊢ 出来事yの実現への欲求

##### <感情の実践的推論>

欲求x & 状況認識(「欲求xの実現と関連する出来事yが生じた」) ⊢ 感情

#### (補足1) 感情は能動的である。

しばしば「理性は自発的(能動的)で、感情は受動的である」という記述を目にする。特に哲学の文献に多いのかもしれない。これは、欧米の言語の使い方にもとづく理解であると思われる。欧米の言語では、感情は殆どの場合受動形で表現され。しかし、日本語では感情は殆どの場合能動形で表現される。

I am pleased. 私はうれしい。

I am pained 私は悲しい

I am satisfied. 私は満足だ

I am annoyed 私は腹が立つ。

I am disappointed. 私は落胆した。

I am surprised. 私は驚いた。

英語でも、感情表現が自動詞の能動形で表現されることはあるかもしれない。また日本語で感情が受け身で表現されることがあるかもしれない。しかし、感情は、欧米の言葉では他動詞の受動形で、日本語では自動詞の能動形で表現されることが多いように思われる。つまり、日本語話者にとって、感情は能動的な態度なのである。

### (補足2) 欲求(ないし欲望)と意志の違いについて

<私たちは、しばしば互い矛盾する複数の欲求を同時にもつ。例えば、美味しそうなケーキを見て食べたいという欲望を持ち、同時に、禁欲的な生活を送りたいと欲求する。これに対して、意志については、互いに矛盾する意志を同時に持つことはできない。週末に山に行くことを意志し、同時に、海に行くことを意志する、ということとはできない。>

(西洋史思想史や東洋思想史の中での、「欲求」「欲望」と「感情」の関係についての歴史を確認する必要がある。言葉の違いという問題があるので、これはなかなか複雑な問題である。また「欲求」「欲望」と「感情」という言葉の歴史も確認する必要がある。小学館国語大辞典によると、「欲求」の初出は、小栗風葉『青春』(1905—06)であり、「欲望」の初出は、幸田露伴のようだから、これらはおそらく翻訳語である。それに対して「感情」は室町時代から使われているようである。「意志」の初出は、『書言字考節用集』(1717)である。)

- ① 私たちは矛盾する複数の欲望や感情を同時に持つことができる。
- ② 欲望や感情は、受動的なものである。
- ③ 互いに矛盾する欲望や感情の原因は、人格の外部にあり、外部からの異なる影響が、異なる矛盾する感情を生じさせるのである。

おそらく西洋では、①と②を調和させるために、③のように考えるのだろう。これに対して、日本語話者は次のように考えることになるだろう。

- ① 私たちは矛盾する複数の欲望や感情を同時に持つことができる。
- ④ 欲望や感情は、能動的なものである。

もし④をつぎのように言い換えられるとしよう。

- ⑤ 欲望や感情は、人格の内部に発生原因を持つ。

そうすると、①と⑤から次の⑥が帰結する。

- ⑥ 人格の内部には、矛盾がある。

この⑥は日本語話者にとっては、有りそうなことである。戦後の日本、あるいはここ20年ほどの日本では、「自分探し」の本が沢山書かれ、沢山読まれています。それは、私達にとっては、「自分」というものが、西洋人の個人や主体のように確固として存在するものではないと感ぜられるからだと思われる。私たちは常に根本の所で、自分が何かわからずに苦しんでいるところがある。それは仏教の「無我」の教えとも一致する。私たちは、自我が確立していないから、自分がわからないことに困るのではなくて、無いはずの確固とした自我を求めるから苦しむのだといわれて、納得してしまう仏教文化の中に生きている。

(ちなみに今回の講義では、欲求と欲望を特に区別していない。これらを区別して、その区別を実践的推論との関係において分析することが可能であるかもしれない。)

### (補足3) 感覚と感情の区別

感情には理由があるが、感覚には理由がない。感覚には原因がある。 感覚を表現する発話は、感覚を記述する主張型の発話になる。したがって、それを結論とする実践的推論は存在しない。

ただし、思わず「痛い！」とか「熱い！」と叫げんだり、思わず「暑いなあ」とつぶやくとき、私たちは、自分や世界の事実について記述しているのではないように思われる。なぜなら、「なぜ痛いとか叫んだのか」と問われたら、観察によらずに即座に答えられるからである(ただし、その答えは「原因」であり「理由」ではない)。したがって、これらは、観察によって事実を記述している発話ではないように思われる。しかし、真理値はある。なぜならそれらが言い間違いであって、「冷たい！」と言うところを、「熱い」と言ったり「痛い」と言ったりすることもあるからである。

(補足4) 上記の事前意図や欲求や感情についての推論の結論は、それらを表現したり構成したりする発話であって、記述する発話ではない。私たちは、他方で自分の感情や他者の感情について、「彼女はとても悲しんでいる」などと記述することができる。そして「なぜ彼女はそんなに悲しんでいるのか」と問うことができ、その理由を答えることができる。「なぜなら、彼女は騙されていたことを知ったからです」がその答えならば、私たちは、これを前提としてつぎのような推論を構成できる。

彼女は愛されていると思っていた。

しかし、彼女は騙されていたことを知った。

ゆえに、彼女は悲しんでいる。

ただし、この推論は、実践的推論ではなくて、理論的推論である。

(8) 以上で、実践的推論の多様な形態について、ほぼ概観できただろう。

このような実践的推論は、真理の転送でなく、意図の転送であるかもしれないが、しかし、アンスコムのように、論理的な必然性をもたない。なぜなら、それはデフォルトな前提をともなっているからである。(自然法則から、特定の自然現象について予測するときですら、私たちは多くのデフォルトな前提をもっている。)さらにデフォルトな前提がないとしても、理論的推論で示したように、複数の前提から論理的真であることが帰結する命題は非常にたくさんある。それと同じことは、実践的推論の場合にもいえるだろう。

それにもかかわらず、実践的推論によって、ある一つの行為や、ある一つの意図や、ある一つの感情が、結論として導出されるのだとすれば、それを可能にしているのは、間に答えようとすることである。

したがって、実践的推論の場合にも、推論は問いを前提する。